

勇者じゃないと追放された
最強職【なんでも屋】は、
スキル【DIY】で異世界を
無双します

3

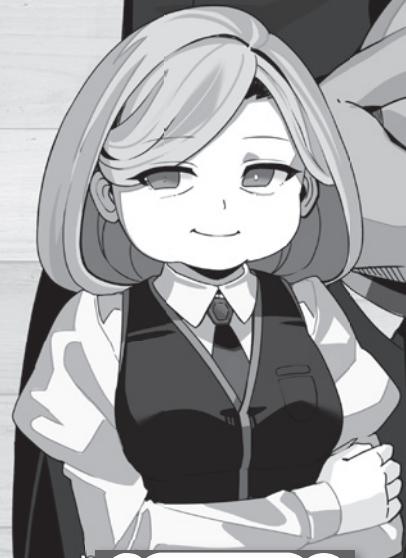
Kaede Hanaoto
著 華音楓
絵 ファルケン

登場人物紹介



* シュミット公爵 *

カイトの後ろ盾
となった貴族。



* キャサリン *

冒険者ギルドの
受付嬢。



* シャバス *

冒険者ギルドの
ギルドマスター。



* デイジー *

エルダの幼馴染の
冒険者。魔弓士。

* ポール *

エルダの幼馴染の
冒険者。盾使い。

イシダテカイト
石立海人

本編の主人公。25歳、サラリーマン。異世界に召喚されるが、勇者ではなかったため追放され、冒険者として生計を立てることに。

* エルダ *

冒険者の魔法使い。
カイトのパーティーメンバー。

■二十五日目 ヘタレと秘密と今後の予定

サラリーマンだった二十五歳の俺——石立海人は、勇者を必要とした異世界の王様によつて召喚された。しかし、職業が【なんでも屋】で所持スキルが【D I Y】だったため、城から追放されてしまう。もちろん日本に帰る方法など教えてもらえなかつた。そのため、俺は当面の間、冒険者として生きていくことにした。

ありがたいことに、魔法使いのエルダがパーティーメンバー兼同居人になつてくれたので、異世界の知識はなんとかなつてゐる……多分。

また、複数の職業スキルが使える【なんでも屋】と、素材とレシピがあればなんでも作れる【D I Y】のおかげで、各ギルドと有力貴族のシュミット公爵が後ろ盾になつてくれて、生活は安定しそうだつた——

ギルド会議で疲れ果てて眠つてしまつたエルダをおぶつて帰つた翌日。

この日はいつもと違つていた。

朝目が覚めると、隣には……

なんてことにはならないからね?

ヘタレです……

ごめんなさい。

帰ってきた後、ちゃんとエルダを彼女の部屋のベッドまで運んで、俺は自室で寝ました。やましいことなんて全くしなかつたよ。

それに、そのまま部屋にいて「え? いつまでそこにいるの?」って嫌な顔されたら、本気で家に出するレベルで恥ずかしいじやないか……

というわけで、俺はヘタレじゃなくて空氣の読める紳士しんしだつてことを、ここに宣言する!!

そんなことはどうでもよくて、いや、どうでもよくないか? まあいいや、今日からの活動について考えなくては。

昨日の会議で、各ギルドに渡りをつけることに成功した。

しかしそれは、あくまで“協力関係を築いた”に過ぎない。

互いに信頼できるようになるかは、まだまだこれからの方次第つてところだろうか。

俺と一緒に召喚され、本当の勇者らしい会社の後輩こうばい——西森樹莉亞にしもりじゅりあの情報については、入り次第教えてくれるつていうから、それは甘えておこう。

どうせ俺が動いたところでわかるわけはないんだから。

それと、少し意外だったのが、商業ギルド以外から俺の後ろ盾ごろとうになることに対する見返りが要求

されなかつたことだ。

てつくり何かを要求してくるかと思つていた。

特に、薬師くすしギルドは一切動きを見せなかつた。

ただ、ギルマスのルドルフさんの視線が強烈だつたのは覚えている。

危機感あきというか焦りあせりといふか……

そんな感情を含んでいるように見えた。

とはいひ、敵対しようとかそういう感覚ではないと思ひたい。

逆に要求がないことが不気味に思える。

むしろ、要求してきた商業ギルドのドルーの方が信用できるつてことが不思議でならない。

彼とは、あくまでも対等だつた。

向こうがこれを出すから、こつちはこれを出す。

win-win な関係。

ドライと言えばドライだし、ビジネスライクと言えばビジネスライクだ。

だけど、そこにはある一定の信頼関係が構築されている。

『商人とは、相手からの信頼を得て、己の利益を最大限に高めるもの』とは、よく言つたものだな。

確かに昨日の会議ではドルー——商業ギルドの信頼度が上がつて、さらに収納箱（簡易）という利益を得ていつたんだから。

本当に狸たぬきどもの化かし合いは好きになれないな。

というよりも、ごく一般人の俺を巻き込むよつて思う。

こればつかりは仕方がないけどね。

身支度を終えた俺は、一階のリビングへ下りていこうとした。

リビングではエルダがすでに起きてくつろいでいる。

珍めずらしく部屋着のままだ。

よく見ると、ソファーの上でクツシヨンを抱いて、ジタバタしたり、突然止まつてはクツシヨンに顔をうずめたりと、せわしない動きをしていた。

一体何をしているんだろうと、下りるに下りられなくなつてしまつた。

俺が階段の途中で足を止めていたら、不意にエルダと目が合う。

「え？」

エルダは動きを止めて硬直してしまつた。

みるみる顔が赤くなり……

いつも以上に俊敏しゅんびんな動きで、ソファーの後ろに隠れてしまつた。

「あ……」

うん、その動き、めっちゃ可愛かわいいです!!

「おはよう、エルダ」

「おはよう……いつから見てたの？」

少しだけ顔を覗のぞかせたエルダは、ちょっと涙目になつていた。

「ちよつと前……ソファーに寝ころんでジタバタしていたところからです」

「～～～～ツ!!」

エルダはさらに赤面させて、ものすごい勢いで再びソファーの陰に隠れてしまつた。

「い、い、今見たことは忘れて!! いいわね!!」

またも顔を少しソファーの陰から出した彼女に、ものすごい剣幕で怒られてしまつた。

よほど恥ずかしかつたのか、ダッシュで俺の横を通り抜けて二階の自室へ戻つてしまつた。

なんて言つたらいいのかわからない。

ただ……エルダめっちゃ可愛かわいいんですけど!?

絶対狙つてやつてるよね?

俺の好みをばつちり押さえすぎじゃないか!?

やばいやばいやばいやばい。

落ち着け俺!!

俺は気持ちを落ち着けるために、キッチンでお茶の準備を始めた。

最近は慣れたもので、お茶くらいは自分で淹いれるようになった。

自分用のお茶を淹れてソファーでくつろいでいると、エルダが二階から下りてきた。

「おはよう、カイト。早いわね？」

え？ ちよつと待つて、さつきの出来事を一切なかつたことにしようとしてません！？

しかし、俺は空気が読める男。

「おはよう、エルダ。なんだか目が覚めちゃつたからね。お茶淹れようか？」

「お願い……………って、できるわけないわよ!! なに普通に返事してるので!!」

理不尽!!

ちゃんと空気読んだのに、結局怒られたんですけど!?

「どりあえず落ち着こうか。今お茶淹れるから座つてて」

俺がキツチンへ向かうと、エルダはソファーにそわそわという感じで腰を下ろした。

そして、見てしまった……

彼女が俺の飲みかけのお茶を飲もうかどうか迷つている姿を……
もう勘弁してください。

理性が限界突破しそうです!!

落ちつけ俺!!

深呼吸をしながら、お茶の準備を進めていく。

でもあれだよな。自分の淹れたお茶を誰かに飲んでもらうつて、地味に嬉しいものがあるね。

お茶の準備が終わり、わざと音を立てながらリビングへ運んでいくと、エルダはソファーにきちんと座りなおしていた。

「どうぞ。熱いから気をつけてね?」

「あ、うん、ありがと。あちつ」

「言わんこっちゃない」

そんなやり取りをしつつ、ゆつたりと朝を過ごした。

あれ？ そういえば、まだこれからことを相談できなくなない？

エルダと朝のひと時を満喫した俺は、今日の予定について話し合つた。

「どりあえず、こんなところかな？」

「そうね、それでいいと思うわ」

その結論は、とくに——

①冒険者ギルドに寄つてシャバズのおっちゃんと昨日のことをまとめる。

②その後に時間があれば、依頼を受けて貢献度を稼ぐ。

③時間がかかつた場合は、探索を諦めてそのまま帰つてくる。

こんな感じだ。

エルダが作ってくれた朝食を食べて、俺たちは冒険者ギルドへと足を運んだ。移動中、しきりにこちらを見てくるエルダがなんだか可愛く見えてくる。

これは一体どういうことなのだろうか……

何かのサインなんだろうか？

だがしかし、俺の勘違いってことも……

いや、ここは男らしく告白とかした方がいいのか!?
いやいや、実は「どつきり大成功!!」っていうプラカードを準備しているとか!?
いやいやいや、エルダがそんなことをするはずがない!!
いやいやいや、しかし……でも……

なんて迷つてたら、冒険者ギルドに着いてしまった。

結局ヘタレ全開でした……

チラリとエルダに視線を向けると、呆れ顔になっていた。
あき

小さな声が聞こえてきた気がする。

うん、ごめんなさい……

ギルド会館前まで来ると、エルダは冒険者のエルダに戻っていた。
このキリッとしたエルダもまたいいよなって思つてしまつたのは、オフのときの彼女の可愛らしさ

さからすると仕方のないことだろう。

だけど、さっきのは本当に一体なんだつたのか、わけがわからなくなってきた。

とりえず、女心と秋の空。

俺にはどうやら理解が及ばないらしいです。

俺……どんづ感じじゃないはず?

ギルド会館に入ると、俺たちを見つけたキャサリンさんが、カウンターから手招きしていた。
「カイト君とエルダさん、おはようございます。ギルマスが呼んでますので、執務室まで来てくれるかしら」

「わかりました。カイト、行きましょう」

エルダが即答してしまった。

もしかして頼られていない?

こうして俺たちは、キャサリンさんの案内で執務室へ移動した。
コンコンと、キャサリンさんがドアをノックする。

「ギルマス、二人をお連れしました」

「おう、いいぞ。入ってくれ」

そこはいつも通り、おっちゃんは書類に埋もれていた。

何が“いい”のかさっぱりわからない。

どう考えても“いい”と言えないだろ、これ？

「ギルマス……早く書類仕事を片づけてください。二人とも、ソファーに座つてちょうどいい。今お茶を淹れるわね」

そう言うと、キヤサリンさんは給湯室へ引っ込んでしまった。

俺とエルダは言われた通り、ソファーに座つて待つことにした。

カチコチカチコチ。

カツカツカツカツ。

時計の音と、おっちゃんがペンを走らせる音が執務室に響き渡る。

カチコチカチコチ。

カツカツカツカツ。

まだ終わらないらしい。

その間に、キヤサリンさんがお茶を持って戻ってきた。

「お待たせ。熱いから氣をつけてね。今日のお茶菓子は、ギルマスの好物のカステラよ。棚にあつたからどうぞ」

「ありが……」

俺が受け取ろうとしたら——

「ちよつと待て!! それは俺が昨日やつと買ったやつじゃねえか!! まじでやめてくれ!!」

「おっちゃんが必死の形相で訴えた。が……
ん、ふおつふふおおふおふあつかふお？」

すまん、おっちゃん……すでに俺の口の中だわ……
エルダは……うん、頬張つてた。
ごちそうさまでした。

「まじかよ……」

やつと書類の片づけが終わったおっちゃんが、絶望の表情を浮かべている……
ごめん……めっちゃうまかつたわ。

「いつまでも終わらせないあなたが悪いんです。少しは反省なさい!!
「はい……」

キヤサリンさんがおっちゃんを叱つている。

うん、どつちが上かわからなくなってきた。
それより話つてなんだろうな。

「ウォッホン。畜生……仕切り直しだ。まずは、昨日は、苦労さん。まあ、どうにかこちらの望み

通りの結果になつた。でだ、まずはシュミット公爵からこれを預かつた
おっちゃんが取り出したのは、一通の封筒だった。

公爵家の封蠅ほうろうがしてある。

おつちゃんによると、俺以外が開けると燃えるうえに、公爵へ通知が行くそうだ。

その封蠅ほうろうが魔道具になつてゐるらしい。

本当にファンタジー万歳ばんさいだな。

封筒を開けると、一枚の手紙が入つていた。

『本日の会議、誠に有意義であった。おそらく今後について悩んでおることだろう。カイト、そなたはまず己の力を高めよ。それができなくば、今後降りかかるであろう困難を乗り越えることはできない。よつて、これはカール・フォン・シュミット公爵としての厳命である。今でき得ることを行ひ、己の力を高め、備えよ。いいな?』

うん、全力でフラグじやねえかよ!!

マジで勘弁してくれ。

ただでさえキャパオーバーだつて言うのに……

ギルマスを見ると、ある程度話は聞いていたのだろう、薄笑いしていた。

手紙をエルダにも見せたが、同じく薄笑いをするしかなかつたようだ。

「とまあ、そんな感じだ。カイト、お前さんはこれからガンガン依頼を受けて鍛えてもらうから覚悟しろよ。いいな?」

「いや、それはそれでいいんだけど……絶対さつきのお菓子の恨み入つてるだろ?」

おいおつさん、目をそらすな!!

「まあなんだ、力をつけるためには戦わなきゃなんねえ、し、ランクもあげねえ」と変な貴族の横やりも入るだろう?だから頑張がんばるしかねえだろうがよ』

「わかりました、わかりましたよ!! やりやいいんでしょ!! まつたく、ゆつたりまつたり生活はどこ行つたんだよ』

「それは、厄介事やっかいごとが全部解決してからのご褒美ほうびだと思えば頑張がんばれるだろ?」

ほんとにさ、いいように使われてるとしか思えなくなつてきたな。

「公爵からの話はここまでだ。次にこれからのことだが……どうするか決まつたか?」

「実はこれといつてないんだよね。結局できることをやつっていくしかないからさ。今はダンジョンに行って、さらに奥に進むくらいしかできない」

おつちゃんからの質問にそう答えるしかなかつた。

強くなるためには素材集め、戦闘、クラフトの三つをどうこなすかって話になつてくる。
今回おつちゃんと相談して——

①当面はダンジョン探索をメインとして地力をつける。

②集まった素材で装備を新調する。

③定期的にクラフトを行い、スキルレベルを上げる。

④各ギルドからの製作依頼をこなす。

ということになつた。

特に④の各ギルドからの製作依頼は、俺への指名依頼という形にすることになつた。つまりは、これをこなせば貢献度が稼げて、楽に冒険者のランクを上げられるつて寸法だ。

なんだかずるしている気がするが、気にしたら負けだ。

なんとなくだけど、何をするか決まると気持ちが軽くなつた。

「それじゃあよ、一発目の指名依頼をこなしてみねえか?」

「面倒事じやない限りはね」

俺が皮肉交じりにそう答えると、苦笑いを浮かべつつ、おつちゃんは机の上に一枚の依頼書を置いた。

そこにあつたサインは、間違いなくドルーのものだつた。

「まあ、想像通りの商業ギルドからの依頼だ。内容は収納箱（簡易）の製作と納品だ。数は二十箱。報酬は一箱金貨十枚。合計三百枚だ。受けるだろ？」

「ああ、もちろん。約束したからには作らないわけにはいかないだろう? というよりも、断つてもいいのか?」

ちよつと悪戯心が湧いてしまい、なんとなくそう口にしてしまつた。

おつちゃんは首を横に振ると、そつとその依頼書のある部分を指さした。

そこには赤文字で“ギルド依頼”と書かれていた。

「こいつがある場合、基本的には強制依頼だと思つてもらつていい。断ることは可能だ。だが……。その分の貢献度の低下は馬鹿にできないがな」

おつちゃんはそう言つてニヤリと笑つた。

ほんと、こういうところは手回しがいいことで。

というわけで、俺は最初の指名依頼をこなすことになつた。
もちろん、ドルーからの収納箱（簡易）の製作だ。

数は予定通りの二十箱。

「ついでだから、冒険者ギルド用の収納箱（簡易）の製作も請け負つてくれねえか? 条件は商業ギルドと同じで構わん。数は五箱。行けるか?」

なんだかんだで冒険者ギルド用の五箱も追加発注となつた。

しかし、それだけの量を作るとなると、手持ちの木材では足りない。
どうしたものかとおつちゃんと相談したら、一発で解消した。

伝家の宝刀“ギルド依頼”だ。

すぐさまおつちゃんはサインをして一階に送り出した。

おつちゃん曰く、数時間もしないで集まるはずだそうだ。

おつちゃんの言葉通り、木材はすぐに必要量が集まつた。

依頼は取り下げていなかっため、木材はまだ送られてくるそうだ。これで、しばらくは木材の心配

はなくなつたようだ。

というわけで、さつそく作業に取りかかつた。

俺ははじめに机（簡易）と椅子（簡易）を製作する。

「おいおい、いきなり何作つてるんだ？ 依頼品じやねえだろ、それ？」

「そうなんだけどね。これがあるのとないのとでは、全然作業効率が変わつてくるんだ」

おっちゃんにその性能——SP回復速度上昇——を説明すると、是非とも作つてくれと頼まれてしまつた。

それは、俺のことを木工ギルドに登録してからだつて話したら、すでに全ギルドに登録済みだつて返答だつた。

ほんと手回しいいよな。

今回は木材を大量に集めてもらつたので、順次作成していく。

正直この間、特に何か頑張つたつてことはなかつた。

椅子に座り、SPと素材を消費しながら製品を作る。

あまりに流れ作業なので、眠くなつてきたのは内緒だ。

それから二時間くらい経つただろうか……依頼品が完成した。

依頼品の収納箱（簡易）が、商業ギルド用の二十箱と冒險者ギルド用の五箱。

あとは別途頼まれた机と椅子が多数。

うん、俺頑張つたよな？

ただその後が大変だつた。

俺の前に金貨が積まれていく。

まずは商業ギルドからの報酬が金貨二百枚。

冒險者ギルドからの買取価格が金貨百五十枚。

合わせて三百五十枚。

今までの金策の苦労はなんだつたんだろうな……

一気に大金持ちじゃないかな。

小市民の俺からしたら、まじで心配になる金額だつた。

キヤサリンさんに聞くと、冒險者ギルドでは銀行業もやつてているらしく、高価なアイテムやお金

を預かってくれとのことだ。

さすがにこんな大金を持ち歩くわけにもいかないので、エルダと相談して金貨十枚分の銅貨以外を預けることにした。

しばらくして俺たちの目の前に“ドン!!”と布袋が置かれた。

その袋一つに銅貨百枚が入つており、数は十袋ある。

二つをエルダに渡し、食料の買い出し用に使つてもらつた。

残りの八袋は俺のアイテムボックスへしまうことにした。

あとは必要なときに取り出して使う。

この金額には、エルダも若干引いていた。

おっちゃんとの必要な打ち合わせも終わつたので解散となる。

時間を確認するとすでに昼を過ぎており、エルダと相談してこれから探索は無理と判断した。

だから、今日は休息に充てることにした。

ということで、エルダは食料の買い出しに出かけていった。

俺はというと、薬師ギルドへ回復ボーションの材料を調達に向かつた。

自分たちが使う最低限の回復ボーションをストックしておくためだ。

俺は、冒險者ギルドのすぐ目の前にある薬師ギルドへ足を運ぶ。

薬師ギルド会館へ入ると、少し気の抜けた元気な声が聞こえてきた。

受付カウンターから聞こえた声の主はエイミーだ。

ちょうど彼女が客を見送つたところなので、俺は彼女のところへ行く。

「こんにちは、エイミーさん」

「あ、お兄さんいらっしゃい。それとエイミーでいいよ。さん付けされるとなんだかむずがゆくなるしね。それで、今日は何をご用命かな?」

彼女はどうやら俺を気に入つたらしく、ニンマリと笑っている。

「今日は素材を買いに。ヒール草とスライムゼリー……あとは、弱毒草を貰^{もら}いに。あ、そうだ、他にも何か薬草類入つてる?」

そう、ここは薬師ギルド。

きっと俺の知らない薬草が集まつてているはず!!

はじめからここに来ていれば、いろいろ覚えられたかもしれないな。

ああ、今更だけね。

「そうだね……ちょっと待つて、在庫リスト確認するから。あ、あと、ギルドランクによつて販売できるものも変わるから気をつけてね」

エイミーがそう言つて裏に引つ込んでしまつたせいで、手持ち無沙汰になつてしまつた。

どうにも落ち着かず、そわそわしていると、後ろから声をかけられた。

「あれ? 確かこの前来てくれた……カイトさん……でしたつけ? 今日も買い物ですか?」
声をかけてきたのは、エイミーと同じ受付嬢のミオさんだつた。

なんというか、大和撫子^{やまとなでしこ}(?)的な印象を受ける。

俺からしたら和装って感じなんだけど、この世界で和装という表現が通用するかわからないから、あえて言う必要はないだろうね。

それと、ミオさんはエルダとはまた違う美人だ。

きりりとした面立ちに凛とした佇まいがその美人度を上昇させている。

「ええ。薬の素材を仕入れに来ました」

「そうでしたか。エイミーは……つと、今確認作業中ですね。では、今しばらくお待ちください」

「あ、ミオ。おかえり！」

奥から在庫の確認作業を終えたエイミーが顔を出した。

手には何やら目録的なものを持っている。

「ただいま帰りました。きちんと店番できましたか？」

「もう!! 子ども扱いはやめてよね!!」

ふくれつ面のエイミーもまたチャーミングだった。

なんていうか……そう、小動物的な？

それを見たミオさんはくすくすと笑っていて、なんだかほつとする一場面だった。

「もう。えっと、お兄さんに今卸せるのはヒール草と弱毒草とスライムゼリーとパラライの実と眠り苔かな？ 今最低ランクだから、強い薬効の薬草は卸してあげられないんだよね。あと、パラライの実と眠り苔はどちらも銅貨二十枚ね」

「そつか、じゃあヒール草を百とスライムゼリーが五十。あと、弱毒草とパラライの実と眠り苔をそれぞれ十もられるか？」

「えっ？」

なぜか二人が驚いて硬直してしまった。

別に驚く数じゃないと思うんだけどな。

回答。ボーションが五十本作れる量でしかないんだから。

「どうしたの？ なんかまずかった？」

「いや、お兄さんが太つ腹だと思つてさ。正直窓口で大口購入する人は少ないんだよね。大口顧客は契約して窓口を経由せずに直接卸しちゃうからここに来ないんだ」

「なるほど。それって俺でもできるの？」

「ごめんなさい。カイトさんはまだ最低ランクだし、そもそも契約できるのは店舗を持っている薬師と鍊金術師に限られてしまうのです」

エイミーが理由を説明してくれた。

ここに来るのは、駆け出しの薬師、鍊金術師とか、あとは店舗を持たない人などが大半で、彼らに卸すのは回復ボーションでも十本作る程度の量が関の山なんだそうだ。

「そつか、教えてくれてありがとう。それで、数は準備できそう？」

「それはOKだよ。じゃあ、料金は全部込々で金貨七枚と銀貨一枚」

「何が込々なんだかわからないけど、銅貨でもいいかい？」

「OK、銅貨なら七百二十枚ね」

俺は袋七つと二十枚の銅貨を取り出して、カウンターに置いた。

エイミーが物を取りに行つてゐる間に、ミオさんが銅貨を数えていた。

「はい、確かにいただきました。じゃあ、領收証を発行しますね…………お待たせしました。これがあれば、品質に問題あつたとき交換などができますので、なくさないでくださいね」

「あれ？ 前は貰わなかつたよね？」

「これだけの数ですから、チェックが済れた商品が入つてゐる場合があるので。そのためのものです」なるほど、商売に対して誠実だな。

勉強になる。

エイミーの準備が終わるまで、ミオさんと他愛のないおしゃべりをしていた。

ミオさんはこの国の出身ではなく、この大陸より東に位置する島国『東武国』の出身なんだとか。そこでは米に似た穀物も取れるらしく、米に似た穀物を炊いたものに合うようにと、また賢者様によつて納豆が伝えられたとか。

一度は行つてみたいな東武国に。

それと、びっくりだつたのは、ミオさんのお姉さんが、魔道具ギルドのギルマスのマイ・ウエマツさんだつてことだ。

どうりで似た雰囲気ふんいきを持つてゐるわけだ。

しばらくすると、奥から商品を持つてエイミーが戻つてきた。

「

ものすごく重そうだつたけど……

「お、お、重たかつた！」

ドンとカウンターに荷物を置いたエイミーは、息も絶え絶えで額の汗をぬぐつた。目の前には袋が四つ。

それぞれ薬草が分けて入れられていた。

「ねえ、エイミー。台車を使えば楽だつたんじやない？」

「それが聞いてよミオ。私が使おうとした台車を、ラッセルが無理やり持つていつちやつたんだよ。伯爵様の納品に使うから寄越せつて言つて無理やりだよ。ひどくない？ こんなか弱い子に手で運ばせるなんてさあ！」

どこにでもいるもんだなあ……

そういうやつには、いつか天罰が下くだるといいんだけどね。

「またラッセルさんですか……わかつたわ、ギルマスにはきちんと報告させてもらいます」なんだかミオさんからただならぬ気配がする……

黒いオーラが見える！？

もしかして、ミオさんって武芸とかできる人？

ひよつとして俺より強いんじゃ……つてくらいの殺氣を感じてしまつた。

話はそれてしまつたけど、持つてきてもらつた薬草類を確認したら、品質が高いことがわかつた。

正直言うと、どんない素材を使つても、俺が作ると必ず品質が（低）になつてしまふから、素材自体もここまでいいものでなくともいいんだが。

むしろ低い品質でも同じく（低）になるあたり、俺の作り方は異質なんだと改めて実感した。エイミーたちもそれを察しているだろうに、それでもいいものを用意してくれたのは、薬師ギルドとしての矜持（きょうじ）なんだろうな。

「確かに。数量も問題ないね。ありがとうエイミー、重かつたでしょ？」

ミオさんが、ヨシヨシとエイミーの頭を撫（な）でてねぎらう。

「ほんといやんなつちやう!! あとで絶対ラッセルに悪戯（いたずら）してやるんだから!!」

そう言うと、エイミーの目が“キラーン!!”ってなつた気がした。

曰（い）元なんて小悪魔（いたずら）のようにニンマリとさせてているし。

これ絶対、どんな悪戯（いたずら）しかけるか考てる顔だ。

うん、この子もこの子で大概（たいがい）だな。

「じゃあ、これで失礼するね。また何かあつたら来ます」

「バイバイ。そのときはよろしくね！」

「カイトさん、お気をつけで」

俺が貰（もら）つた袋をそのまま持ち上げたらびっくりされた。

これでも一応冒険者だからね。

これくらいは……つて、俺は本当に冒険者なんだろうか。

冒険者つて、薬師ギルドで素材を買わないよね、普通。

まいつか、俺は俺だし。

あと、買ったものは薬師ギルド会館を出たら物陰で全部アイテムボックスにしまうんだけどね。買ひものが終わり、薬師ギルド会館を後にした俺は自宅へと向かつた。

途中変な気配らしきものを感じたけど、よくわからなかつた。

一応警戒して歩いたものの、経験不足の俺はそれが何かまでは把握（はあく）することができなかつた。

まあ、きっと閣下の密偵が見張つてるからなんとかなるかなつて楽観視していたのは事実だけど。

「ただいま」

自宅に着くと、誰もいなかつた。

エルダはまだ買ひものの途中らしい。

よくよく考えると、エルダの行動つて新妻みたいだよな……

新妻……手料理……えぶるん……

……………

いかん!! 邪な考えを浮かべてはいけない!!

そう、エルダは同居人であり、パーティーメンバーだ。バディだ。

邪念を振りほどいた俺は、作業室に急いで移動した。

それにも、ものが増えて作業室がどんどん手狭になつていくな。
そのうち改築しなきやいけなくなるかも。

まあ、そのときはそのときか。

今はこの生活を安定させることを考えよう。
さてさて、取り出したるは買つてきた薬草!!
まずは初お目見えのパラライの実と眠り苔だな。
とりあえず鑑定してみよう。

スキル【鑑定】!!

パラライの実・果実で味は甘くておいしい。食べるとそのまましごれて数分動けなくなる。レツ

サーマンイーターの果実

眠り苔・湿地に生える苔。動くものが近づくと胞子を飛ばす。胞子を吸い込むと急激な睡魔に襲われる

おつと、どつちも危ないものだつたな。

下手に口にしなくて正解だ。

ピコーン!!

『スキル・DIYのレンジが増えました』

やつぱり増えたか。

どれどれ。まあおおよその予想はつくけど……

技能・DIY レベル2……低級アイテムの作成

▲薬 (NEW)

解眠ボーション (低) (NEW) ……ヒール草1+眠り苔1+スライムゼリー1+精

製水1で1本作成。睡眠状態の回復。SP:5

解毒ボーション (低) (NEW) ……ヒール草1+パラライの実1+スライムゼリー

1+精製水1で1本作成。麻痺状態の回復。SP:5

よし来た。

これで、状態異常に対応できそうだ。

問題は、これを今持つてる素材でどれだけ作れるかってことなんだけどね。
回復ポーションと解毒ポーションも作らないといけないから、計算がメンドクサイ。
まあ、とりあえず二種類のポーションが作ればいいかな。

どちら順番に行くか……

俺は目の前に用意した薬草類の前で腕を組んで思案していた。

結局のところ、どちらスタートしても同じことなんだけどね……

うん、ここはまだ作つたことないポーションから作ればいいかな。

回復ポーションの在庫はあるし。

というわけで、解痺ポーション（低）から作ろう。

俺の今のSPが37で、これから作るポーションは大体消費SPが5か。

まあ、簡易薬物作業台を作るから問題ないでしょ。

「解痺ポーション（低）」×5。

目の前に準備していた薬草類のうち、解痺ポーションの素材となるものが光に飲み込まれていつた。

ほんと、この現象はいつ見ても不思議でならないな。

『解痺ポーション（低）作成中。残り時間：10分。予約枠5／5』

ディスプレイに無事製薬を開始したと表示されていた。

あとは順次進める感じかな。

カツカツカツカツ。

そんなこんなで作業を進めていると、部屋の外から足音が聞こえてきた。
コンコンコンと、扉がノックされた。

「カイトいる？」

扉の外からエルダの声が聞こえてきた。

どうやら帰ってきたみたいだ。

「いるよ。入つておいでよ」

ガチャリと、扉が開かかる。

「うわあ！」

エルダの第一声が呆れ返った声だつた。

「解せぬ！」

「ねえ、前より物が増えてない？ 気のせい？」

「ほら、簡易薬物作業台とか精製水蒸留装置とか増えたからね。今はポーション系を量産中だよ」

そう言つて簡易薬物作業台の上を指差すと、さらに呆れた顔になつていた。

簡易薬物作業台の上には解痺ポーション（低）が十本に、解眠ポーション（低）が十本。さらに、解毒ポーション（低）が五本載つていた。

「ねえ、カイト。あなたお店でも始めるの？ それより、この材料費つていくらかかったの？」

「え？ これは自分たちで使う分だからね。材料費は金貨七枚強？」

あれ？ エルダの目からハイライトが消えただと!?

なんか嫌な予感しかしないんですけど……

「ねえ、カイト君。金貨七枚つてどんな金額かわかるかな？ かな？」

「えつと……」

「金貨七枚あれば、一家族が余裕で一ヶ月は暮らせる金額なんだよ？ それが、なんで一瞬でなく
なつてるのかな？ かな？」

やばい。眞面目にやばい。こ、これを切り抜けねば殺される!!

ピコーン!!

『解毒ボーション（低）×5が作成完了しました』

このタイミングじゃないだろ!!

つて、そうだ!! これだ!! エルダも巻き込めばいいんだ!!

「エルダさんや、ちょっと実験を手伝つてくれないかな？ これが成功すれば、きっと今より稼ぎ
が増えるはずだから」

「本当に？」

エルダの顔色がみるみる戻っていく。

どうやらピンチを乗り切つたらしい。

「そろそろ、前に俺の作った設備が他の人が使えるかわからないって言つたでしょ？ エルダが使
用可能なら、この設備を貸し出しできるんじやないかと思つて。あくまで貸し出しで、半永久的に
お金が舞い込む的な？」

エルダの表情が明るくなつていく……

なんだろう……

エルダのキャラがわからなくなつてきた。

今朝の可愛いエルダはどこにいつ……ひいつ!!

「何か言つたカイト？」

どうして殺氣を込めて名前を呼ぶのかな？

とりあえず、残つているのは回復ボーション（低）の材料だつたので、エルダには回復ボーション（低）を作つてもらうことにした。

「じゃあ、その簡易薬物作業台に触れて、作成するつてイメージしてみて」「こう？」

するとエルダのイメージに反応して、いつもの透明な板が浮かび上がつた。

「なにこれすごい!! カイト!! これすごいんだけど、どうなつてるの!?」

「それは俺もよくわかつてないんだ。じゃあ、次にこの素材を作業台の上に置いてもらつていい？」

エルダは興奮しながら回復ボーション（低）五本分の材料を簡易薬物作業台の上に置いた。

「じやあ、その透明な板に『回復ボーション（低）』ってレシピがあるか確認してもらつてもいい？」

「ちよつと待つて……あつた、これね」

「よかつた。あとは簡単。声に出してアイテム名を読めばOKだよ」

「わかつたやつてみる。回復ボーション（低）」

エルダの声に反応して簡易薬物作業台が光を放つた。

簡易薬物作業台の上の材料はその光に吸い込まれていく。

「カイト!! これどういうこと!? なんかいきなりSPが持つていかれて気持ちが悪かつたわよ!!」

「じゃあ、またさつきの透明な板を呼び出してみて」

エルダが簡易薬物作業台に手を置いて、透明な板を呼び出した。

「あ、作業中になつてる」

「よし!! エルダ成功だよ!!」

俺は大声を上げてから、エルダの両肩を掴んだ。

「エルダ、これで君も俺と一蓮托生になつたよ……」

「え?」

エルダから素っ頓狂な声が返ってきて面白かつた。



これで確定してしまった。

俺を起点に、産業革命を起こすことができる。

俺が作る作業台で、なんの知識もない一般人がポーションを作成可能。

S Pさえあれば“誰でも”作れる。

今はまだ低品質のものしか作れないけど、いずれは最高品質だって作れる可能性がある。

それができなくとも一定品質のものを一般人が作れる。

逆に言えば、これまで手を抜いていた職人たちは淘汰とうたされてしまうだろう。

うん、これはかなり難しい問題だな。

さすがに、俺の手に余る。

本来であればおつちやんを巻き込みたいところだけど、このところ負担をかけまくっているから言いつらいんだよな。

うん、ここはひとつ……

「エルダさんや、ものは相談なんだが……この話は秘密にしてもらえるかい？」

「なんのことですか？ わたしはだいじょうぶ。わたしはなにもみていない。ワタシハナニモシリ

ナイ」

あ、だめだ……完全に現実逃避しちゃったよ。

もう一度エルダの肩を掴んで何度も揺さぶつてみたけど、こちらに戻ってくる気配はないよう

だ……

ホントこれ、どうしたらいいんだ……

「エルダさん。エルダさんや。こっち戻つといで〜」

さてどうしたものか……

ずっと呼びかけても全くこっちを見るそぶりすらない。

なんかブツブツ言つてるし。

仕方ない……これはやりたくなかったんだけどな。

エルダ、ごめん。

俺は意を決して、いまだ現実逃避しながら椅子にもたれかかっているエルダの顔に近づく。

もう少しでエルダの唇に触れそうになる……

そして俺は……

むぎゅつ!!

エルダの鼻を全力でつまんだ。

「痛あ〜〜〜〜〜い!! 何するのよ、カイト!! 痛いじゃないの!!」

「やつと正気に戻つたみたいだね。お帰り、エルダ」

「ほんと、カイトのせいだからね？」

「私をこれ以上厄介事やっかいごとに巻き込まないでほしいわ!!」

本当にごめんなさい。

巻き込んだっていうか、なんというか……

そうなつてしまつたわけです、はい。

「そうだ、エルダつてどうしてここに来たんだ？」

「あ、忘れてた!! 晩ご飯ができたから呼びに来たのよ」

「それ先に言おうか……」

「ごめんなさい」

俺たちはダイニングに移動し、遅い夕食をとることになった。
冷めてもうまいエルダの料理に感謝。

夕食を食べ終わつたころ、エルダから質問があつた。

「ねえ、なし崩し的にダンジョンとか行けてなかつたけど、これからどうするの?」

「そうだな、そろそろ本格的にダンジョン探索をしてみたいし、他の国も見てみたい」

「そのためには、ギルドランクを上げないとね」

エルダからの指摘はもつともだつた。

前から話にあがつていたギルドランク。

せめてAランクにならないと、国外での行動に支障をきたしてしまつ。

そのためには、ギルドランクを上げる必要があるということだ。

「明日からはまた、鉱山跡地ダンジョンかな?」

「そうね、そうなるわね。ただ……」

あれ? なんでそこで言い淀むのさ?

なんか問題でもあるのかな?

「ただ……どうしたの?」

「カイトの装備が心もとないわ。できればもつといいものに替えていかないと。今カイトが作れる
装備つてどんなものが?」

「来た……」

この質問が来てしまつた……

できれば装備したくないのだけれども……

「ええっと、その、あの……」

「はつきりなさい!!」

ドンッという音とともに床が震えた。

エルダが足で床を強く踏み鳴らしたのだ。

「はい!! ロックワーム——岩蠕虫のシリーズ装備が作れるようになつたであります!!」

「そう、ならそれをまず作りましょう。その後さらに奥のダンジョンに潜ります。いいですね!!」

「イエス、マアム!!」

俺はつい敬礼をしながら答えてしまった。

それを見たエルダはキヨトンとしていたが、気にしたら負けだ。

しかし、岩蠕虫の装備には若干の抵抗がある。

だって、岩ミニズだよ？ あの巨大なミニズだよ？

誰が好き好んで着るものか。

「だけどエルダ……さすがにミニズ装備はその……ね？」

「贋沢を言つてる場合じやないでしょ？」

た、確かにそうなんだよな……

しかし、せめてミニズは勘弁してほしい……

「じゃあ、虫系以外の素材つてないの？」

「たぶんあると思うわよ？ 鍛冶ギルドか魔道具ギルド、あとは鍊金術ギルドかな？」

素材を売つ
てもらえばいい話よ。でもそれでいいの？ あなたは世界を見たいんじゃないの？ 自分の手で集

めて、自分の手で作る。そうしたいんじゃないの？ 違う？」

うぐつ。

ほんと、エルダはよくわかつていらつしやる。

その通りなんだよね。

買つて作るのが一番早いっていうのはわかつてるんだ。

今回のポーションだつて、素材を買って作つたんだから。

でもやつぱり、何かが違う気がしてしまつた。

自分で集めて作るからいいのであつて、俺は職人になりたいわけじゃないんだ……

俺は『自由』に生きたいんだから……

「あ、ちなみになんだけど。鉱山跡地ダンジョンの第十一層以降に地底湖があるの。でね、その地底湖には亞龍人……リザードマンが生息しているわよ。つまり、リザードマン系の装備が作成できる可能性があるってこと。どう？ 行つてみたい？」

「マジで!? 行く行く!! 絶対行きたい!!」

これはマジで頑張んないとな。

まずは岩蠕虫の装備作つて、強くなつて……

目指せリザードマン狩り!!

「じゃあ、明日からは鉱山跡地ダンジョンつてことでいいのか？」

「そうね、それでいいと思うわ」

これで行動指針が決まった。

明日朝一で冒険者ギルドへ行つて、ギルマスに面倒事を全部ぶん投げる。

その後に依頼を受けて、ダンジョン探索へ。

徹底的にロックワームを倒しまくつて、装備を作る。

で、第十一階層以降のリザードマン狩り。

素晴らしい!! これでなんとかなる!!

俺の計画は完璧すぎるほど完璧だ!!

「あ、忘れてた。リザードマンがいる場所って地底湖だから、耐水装備を準備しないと。カイト持つてないでしょ?」

「え?」

どういうこと?」

「……………あっ!! そつか!!」

ロックワームは水が弱点だから、その装備で行くと……

丸裸!?

お婿むこに行けなくなっちゃう。

「カイト……変な妄想もうそうしないでね? いいわね?」

「はい……」

なぜいつも考えが読まれるんだ!?

つて、また声に出てたのか?

「そこで提案です。まずは岩蠕虫装備で全身を覆います。ただ、リザードマン対策には向きません。

なので、一度森の奥の『新緑のダンジョン』へ向かいます。そこではオーケーが多く生息しています。ちなみに、エルフ族の天敵で一匹銅貨三十枚の報酬ほうしゅうが支払われるわ。つまり、オーケーを倒してその素材で装備を整えるの。ここまでいい?」

「いいんだけど……オーケーって、あの亜人種的なモンスターだろ? その装備つて言つたら……」「そうね、オーケーの皮をメインで作成するものになるわね。ちなみに、オーケー装備は脱初心者だいしんしやくしゃ」言われているわ。鍛冶屋にはよく持ち込まれる素材だもの」

オーケーか……

エルフ族の天敵……

つまり……

はっ!! あれか!?

まさかの「くつ!! 殺せ!!」的な!?

そんなフラグなのか!?

「……………話を進めていい?」

エルダの表情から笑みが消えた。

ものすごく睨にらまっています……

エルダの視線がつらいです。

「続けるわ。そしてオーケー装備がそろつたところで、今度は湿地帯しつちたいにある『湿地のダンジョン』に

挑戦ね。ここではマッドフロッギなどの爬虫類系^{はちゅうるいじ}がよく出てくるわ。こいつらはもれなく耐水性質^{たいすうせいけいしつ}を持っているから、水属性ダンジョンの初期装備としては持つて来いよ」
「亜人型モンスターの次は爬虫類^{はちゅうるい}。そして今度は亜竜人。うん、モンスターまみれだな……」
「しかたないわよ。さすがに魔法金属系の装備は買えないもの。剣一本で金貨五百枚は軽く飛ぶわよ?」

俺はそれを聞いて、一瞬にして心が折れてしまった。

俺は夢見ていたんだ……

ファンタジー系金属の存在に。

そして、必ずこの手で加工してみせるんだって……

剣で五百枚……無理だ。

……って、あれ? 行けるんじゃね?

収納箱(簡易)を裏で大量に売りさばけば、あつという間に貯まるんじゃね?

「あなた……犯罪者になりたいんだつたら止めないけど、どうする?」

「いえ、やりません」

うん、俺はいたつて眞面目な一庶民としてこの世界を旅したいです!!

逃避行なんてごめん被りたい。

「まあ、正直なところ、すべての装備品を金属製にすることはお勧めしないわよ? 素材で最高級

なのは龍族だもの。墮龍^{だりゆう}の討伐や、龍族と親交ができるて剥がれた龍鱗^{りゆうりん}や抜けた髪なんかを分けてもらいうなんて方法で集めるんだけど、現存する装備の中での最高峰は龍鱗系装備なのよ」
「わかった……地道にやつていくことにするよ。ありがとうございますエルダ、道が見えてきたよ」
「ん、どういたしまして」

エルダと話したことによって、より明確になつた方向性は――

①岩蠕虫^{がんせんちゆう}装備。

②金属回収。

③鉱山跡地ダンジョン第十層のボス部屋の攻略。

④新緑のダンジョンでオーネット狩り。

⑤湿地のダンジョンで爬虫類狩り。

⑥鉱山跡地ダンジョンで第十一層以降のリザードマン狩り。

うん、こんなところかな?

これで、やつと前に進める気がしてきた。

今までは特に目標とか目的とか決めてなかつたけど、こうやつて決まるど、なんとなく気が引き締まる感じがする。

これもエルダのおかげかな?

そう考えたら、これからが俺の本当の意味での異世界生活つてわけだ。

「そうだ、エルダはマジックパックみたいなのが持つててるの？」

「持つてないわね。代わりにポーションホルダーを身に着けたり、パックパックを背負つたりしてるわ。ただ、カイトがいればポーションホルダーだけでいいと思つてしまふのよね」

「なるほどね。じゃあ、でき立ての各種ポーションを持つていいと思つてしまふのかな？」

「そう言うと、俺はアイテムボックスから各種ポーションを取り出し、エルダに渡した。

これで、何かあつても回復ができるはずだ。

俺しか持つてなかつたら、俺に万が一が起つても対応ができないからね。

「もしかして……このためにポーション系を作成していたの？」

「まあ、そうだな。俺たちには回復役がないから、アイテムは生命線になるからな」

「そう。ありがとう」

エルダはそう言うと、俺がテーブルに出したポーションを回収して自室へと戻つていった。

おそらく明日の準備をするのだろう。

夜も更けてきたことだし、俺も自室に戻ることにした。

それにしてもここ数日、濃すぎやしませんか？

俺一般市民だよ？

まったく、この世界は飽きないな……

■二十六日目 買い食いのうまさといらないこと

「ん……ん……朝か……」

目覚めると、部屋に暖かな日が差し込んでいた。

「ん？ これは？」

そんなすがすがしい朝。ふとベッドを見ておかしな点があつた。

俺の横になんだかへこんだ跡がある……

おそらく人の形。

誰か寝ていたかのような、そんな跡だ……

いや、まさか……ね？

「そんなわけはないか……夢……だよな？」

俺はそんな考えを振り払うかのように頭を振つた。

それから着替えて、リビングへ向かつた。

階段を下りる際に、リビングでくつろぐエルダを発見した。

「おはようエルダ。昨日はごめん。変なことに巻き込んでしまつたみたいだ」

「まったくね……でもまあ、仕方ないわね。カイトといふていうことは、そういうことだから。